法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

<書評と紹介> 池松玲子著『主婦を問い直した女性たち : 投稿誌『わいふ／ Wife』の軌跡にみる戦後フェミニズム運動』

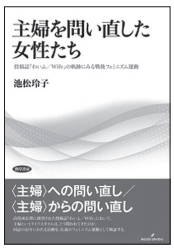
元橋, 利恵 / MOTOHASHI, Rie

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
774
(開始ページ / Start Page)
55
(終了ページ / End Page)
58
(発行年 / Year)
2023-04

池松玲子著

『主婦を問い直した女性たち

——投稿誌『わいふ／ Wife』の
軌跡にみる戦後
フェミニズム運動』



評者：元橋　利恵

戦後の高度経済成長と，性別役割分業を前提とした家族が大衆化していくなか，主婦という女性の生き方が規範化されていく。しかし1970年代以降主婦のパート化が進み，主婦が働くことは「当たり前」となっていき，主婦の自明性は揺らぎ始めていく。その後1980年代には男女雇用機会均等法が制定され，フェミニズム運動の言説の影響が社会に浸透しつつも，他方では第三号被保険者制度や税制の配偶者控除など「主婦優遇制度」が導入されていく。女性のライフコースは複雑化し，現代ではむしろ，「主婦」であることは，なぜそうであるのかと問われることとなっている。

本書は，1963年に創刊された，主婦たちが主体であるミニコミ誌『わいふ／ Wife』を通して，1970年代から2000年代にかけての女性たちの「主婦の問い直し」の内実を明らかにしたものである。日本社会では，例えば「アグネス論争」と呼ばれる職場に子どもを連れていくことの是非を問うものなど，「主婦論争」といわれる女性の生き方をめぐる論争がメインストリームのメディアや様々な女性運動のなかで繰り返しおこなわれ続けてきた。現代においても，例えば「ベビーカー論争」のようなものとして，表層は変われど，男性中心的な社会のなかでの女性の生き方や，折り合いのつけ方が問われるようなものとして繰り返されている。そして，そのような「論争」には差別やジャッジメントの言葉が飛び交い，目にすることで傷ついたり，不毛なものとして遠ざけたい衝動にかられる人も多いのではないだろうか。

だが，本書では，『わいふ』の主婦の生活のリアルを投稿する雑誌であり女性運動でもあるというユニークさとそのなかで展開されるコミュニケーションの形式に着目することで，「主婦を問い直す」なかでの対話が女性たちを力づけていくプロセスに焦点があてられ強調されている。

本書の序章～第1章では『わいふ』を取り上げることの意義が，同じく主婦が当事者である他の市民運動との比較を通して書かれている。生協運動や母親運動など女性が家庭内で担う活動を社会的なものに広げていく運動を「脱・専業主婦運動」，第二波フェミニズム，ウーマン・リブを「反・主婦運動」，そして他二つと異なる第三の運動として「主婦問い直し運動」が位置づけられている。「主婦問い直し運動」は，「書くこと」を中核とした運動である。その潮流として，1950年代初頭の鶴見和子による「生活記録運動」のひとつ「生活をつづる会」が取り上げられる。この「書く運動」は「1つの経験を集団で読み合い批判しあうことで，1人では理解のおよばなかった『物事の関連性，体験の共通性，できごとの起こってきた条件や原因』などが明確となり，その本質的な意味が明らかとなる」（22頁）特徴があり，「より自らの内面に力点を置く運動」と位置づけられる。その根底にあるのは，家父長的な構造のなかで母役割，「嫁」役割など他者のために生きることを余儀なくされ，自己を生きることが困難である者が，まずありのままの生活をみつめ直す

ことを通して自己を取り戻すことであったことがわかる。『わいふ』が該当するこの「書く運動」は，「当時の主婦が自己を取り戻し，それをもって周囲を変え社会変容まで目指した運動」（24 頁）と位置づけられる。

加えて，『わいふ』が「一般の主婦」への普及に重きを置いた活動であり，必ずしもフェミニズムや特定の思想，特定の立場に沿う内容でなくても掲載し，異なる意見を排除せずに考えることを促しつづけるコミュニケーションが編集者の理念としておこなわれたことも重要な特徴として強調される。

本書では，『わいふ』を第一期，第二期，第三期に分類し，三つの期のなかでも田中喜美子，和田好子が編集をつとめた第二期が本書の中心であり，第 3 章から第 8 章にかけて，第二期をさらに助走期（1976-1979），拡大期（1980-1994），成熟期（1995-2006）に分けたうえでそれぞれの時代における『わいふ／ Wife』の変化，誌上での「主婦論争」やフェミニズムの受容，誌上でおこなわれたコミュニケーションの特徴をみていく。

戦後の女性の安定的な生き方がゆらぎはじめた「助走期」では「主婦は養われる存在か」が論争のテーマとなったのに対し，主婦の労働力化がすすみ働くことが自明となる「拡大期」では，「主婦は養われる存在か」どうかは問われなくなる。「女性の自立」の現実的な着地点が模索されたり，主婦であることの社会や地域への貢献が語られだすなど（「主婦の逆襲」），雇用機会均等法や第三号被保険者制度や税制の配偶者控除などの社会背景のもと異なる選択をした女性同士がお互いの立場を知ったり，自己をみつけ相対化するコミュニケーションが展開されていることが詳細に明らかにされている。

そして，「成熟期」における「三歳児神話」は神話か神話でないかという論争からは，「主婦という生き方」への問題意識はだんだん希薄になる一方で，新たに「女性の分断」という論点が出現する。専業主婦と働く女性，子どもをもつ女性ともたない女性，高齢女性と若年女性の間の「対立」がみられ，また同時に「対立」を乗り越えていこうというコミュニケーションがみられるのがこの時期である。興味深いことに，成熟期では，「主婦という生き方」をめぐる関心から子どもに関わること，つまり「母」への移行が読み取られている。女性の生き方を問うという意味では共通しているものの，このような変化は 1980 年代以降女性が働くことが自明になりつつも子育て期に退職する女性が多くいるなか，子育て期に退職する女性はキャリアや収入など失うものが増大した社会的背景と切り離せないものとして分析されている。女性たちは，キャリアや収入を失ってでも子育てに身を投じることを「子どもの価値」として説明するようになった／しなければならなくなった（「子どもの価値」の上昇）のである。

「助走期」から「成熟期」にかけての「論争」に共通しているコミュニケーションのありようも示唆的である。著者が「極端な 2 つの立場に分かれてというよりも，会話的で，同誌の論争では投稿者それぞれの立場は大きく異なっているわけではなく，先鋭的に論を戦わせる構図だったわけでもない，そのために論戦ではなく会話のようなモードで極端な議論にはくみしない傾向がみられ，きっぱりと言い切ってしまうことでとりこぼされることを恐れ，苦心しているかのようなニュアンスのあるコミュニケーションが特徴的にみられた」（144 頁），「いかなる主張も全否定せずに考えることを促す」（同上），「女性的なコミュニケーション」（147 頁）と表現されるあり方が丹念に言語化されている。『わいふ』では，たとえ拙い表現であったとしても，異なる意見であったとしても，一

人ひとりのリアリティが受け止められる場であった。

以上，本書の概要をごく簡潔に記したが，本書の意義を改めて確認したい。第一に，『わいふ』において展開された「主婦の問い直し」をおこなう女性たちのコミュニケーションを可視化し，またその成立要件の繊細な分析をおこなった点である。「女性的なコミュニケーション」は，意図されて演出されたものというよりも試行錯誤の結果的につくられていったものである。一方で，本書からは，そこには白黒つけない，あいまいさを抱えたままの対話を可能にするための編集部の「100パーセントの言論の自由」という理念や，一人ひとりの発言が守られるケアの存在があったことが浮かび上がってくる。例えば，ウーマン・リブの影響を受け明確な政治的な問題意識をもつ編集長の田中らによって，拡大期に『わいふ』は「食える市民運動」へと株式会社として拡大していき，成熟期の1993年には『ファム・ポリティク』という政治的な「姉妹誌」の創刊や「老人ホーム情報センター」，「ニュー・マザリングシステム研究会」といった社会変革的な性格の強い活動が展開されていく。しかし，田中らは，これらの活動を「100パーセントの言論の自由」という理想のために，『わいふ』そのものからはあえて切り離す配慮をしている（233頁）。

フェミニズム運動のみならず現代では様々な社会運動が原理的に凝り固まったり，二元論で物事を捉え判断するコミュニケーションにからめとられていく構造がある。誰の立場も否定しない，だがそれぞれを現実として認め合うような，個々人が納得をみつけていくコミュニケーションは，様々な配慮のもとで可能となるものであり，本書の終章で示されているように，より広範な層を巻き込む「間口の広さ」つまり「リーチ」と「日常生活を変えうる『深い影響』」である「インパクト」のバランスに支えられていることが明らかにされている（312頁）。

本書の意義の第二として，以上のような「女性的なコミュニケーション」の内実を，フェミニズム運動として位置づけた点が挙げられる。前述したように，本書では，『わいふ』の運動は「書く運動」として，「脱・専業主婦運動」「反主婦運動」とは異なる第三の女性当事者の運動として位置づけられ，「生活綴り方運動」からの系譜として描かれている。その肝は，女性が自己定義する力を得ることにある。本書でも引かれていた江原由美子の表現を用いると，「自己決定権」を得るための「自己定義権」，つまり，「これまで何をしてきたか，現に何を行っているか，本当は何をしたいのか」をめぐって自己認識を問い，自分の言葉で語ることである。主婦として性別分業やケア役割に沿った生き方を望まれ，おこなってきた女性は，自分の問題とケアすべきとされる他者や家族の問題を切り離すことが困難な構造に置かれる。本書の第9章で，『わいふ』の会員たちにとって『わいふ』が「妻でも主婦でもない」，「わたし」という個になれる場であったと語られている。そのような，自身の経験や思いを率直に書き，読まれること，他者の率直な経験や思いを読み，考え，反応すること，そしてそれらの言論を守る「介入」や共同の場を維持し続けるという営みは，市民運動を維持する根幹でありながらも，明確な社会変革や政治的な獲得目標を掲げた活動と比べると可視化されにくい。著者も述べているように，第二波フェミニズム運動では『わいふ』の他にも多くのミニコミ誌がつくられてきた。また，アサーショントレーニングに象徴される自己表現や自律性を獲得するための自助グループやフェミニストカウンセリングなどの実践がおこなわれてきた。このように，フェミニズムにも，またフェミニズムに限らず

ともマイノリティの運動の根幹には，自己定義を取り戻すための集団的な営みが存在してきた。本書は，丹念な資料調査と聞き取り調査により，その根幹を丁寧に掬い上げ，フェミニズム運動として評価し位置づけることに成功している。

以上のように，本書は，「書く運動」の力を示すものであるが，最後に，若干の疑問点および課題点として浮かび上がってくることを記したい。第一に，「書く運動」のような「自己定義」の取り戻しと位置づけられるような営み，さらにはその際には共同的に必要となってくる細やかなコミュニケーション，異なる意見を排除しない配慮，継続的で対話的な関係性の構築といったものは，「脱・専業主婦運動」「反主婦運動」など他の女性当事者運動には見出せないものなのだろうか。例えば，第二波フェミニズムのなかで「個人的なことは政治的」として家庭や身体，性など私的領域のこととされた問題を社会的，政治的な問題として捉え直していく際の手法であった，コンシャスネスレイジング（consciousness raising）というグループでの対話を通して意識の変革を図っていく手法でも，相手の批判をしない，意見を受け止めるなどの一定のルールやコーディネートが必要である。たしかに，コンシャスネスレイジングは小グループでの対面対話とされており，書くことで成り立つミニコミなど「書く運動」とは形式が異なる。しかし，対話的コミュニケーションによって「自己定義」を取り戻すというその本質的な性格は共通しているのではないだろうか。さらには，評者は母親運動の調査研究をおこなってきたが，母親運動においても，「わたし」という個になれるコミュニケーションがその活動の根底を支えるものとして見出された。このように，ウーマン・リブのような社会変容を大きく掲げた運動や「主婦の問い直し」の視点を有していない「脱・専業主婦運動」の裏にも自己変容の活動があったことは本書の議論ではどのように位置づけられるだろうか。本書の礎を踏まえて，さらに踏み込んだ分析が可能になるのではないだろうか。

第二に，少々外在的な問いかもしれないが，現代ではフェミニズムとしての「書く運動」はどのように見出されるものだろうか。現代では，ミニコミやZINEと呼ばれる独自の媒体のみならずソーシャルメディア，特にSNS（ソーシャルネットワークサービス）を駆使した発信や表現が市民運動の主流となっている。むしろ，一般的にはフェミニズム＝SNSで展開されるものと理解されている可能性もある。SNSは，現代において例えば子育て中の女性が「育児アカウント」を作成するように，近い境遇の他者とオンライン上で出会ったり，自己の「もやもや」を言葉にするためにまず手が届くツールである。その一方で，エコーチェンバー現象により情報が偏ったり，攻撃的なコミュニケーションや「敵か味方か」といった二元論に絡めとられやすく，「分断」が生じやすい側面も問題視される。現代において，『わいふ』における誌上コミュニケーションが成立するような条件はいかに見出すことができるのか，本書を踏まえての考察は重要な意義があるのではないだろうか。

（池松玲子著『主婦を問い直した女性たち――投稿誌『わいふ／ Wife』の軌跡にみる戦後フェミニズム運動』勁草書房，2020年12月，ix＋346頁，定価7,700円（税込））

（もとはし・りえ　大阪大学大学院人間科学研究科助教）